



国立水俣病総合研究センター（国水研）広報誌

# とんとん峠

28号  
(2010.12)

今年も残りわずかとなりました。今年  
は秋の訪れを感じることなく冬支  
度を始めた方も多いのではないでし  
ょうか？

本号の特集では、国水研の国際的な  
水銀研究振興への取り組みとして十  
月に開催した「スロベニアワークシ  
ョップ」の様子を紹介します。とんと  
ん峠を御覧になって頂き、少しでも国水  
研の活動を知って頂けたら幸いです。

国水研は、水俣病に関する総合的  
な調査、研究、そして国内外の情報の  
収集、整理及び提供を行うこととこれ  
らに関連する研修の実施を目的とし  
て環境省の機関として熊本県水俣市  
に設置されています。

国水研は、わが国の公害の原点とい  
える水俣病とその原因となったメチ  
ル水銀に関する総合的な調査・研究、  
情報の収集・整理・研究成果や情報の  
提供を行うことにより、国内外の公害  
の再発を防止し、被害地域の福祉に貢  
献することをめざしています。



## 目次

● **特集**

『平成二十二年度スロベニア  
ワークショップ』

● 国水研の動き（八月～十一月）

● 国水研からのお知らせ

● 編集後記

● アクセスマップ

## 『平成二十二年度

### スロベニア

## ワークショップ』

国水研では国際的な水銀研究の振興を目的に、海外でのワークショップを開催しています。本年度は、去る十月十日～十四日の間、スロベニア共和国ピラン市で、スロベニア共和国のジョゼフステファン研究所との共催で水銀汚染に関するワークショップ「水銀汚染地域に関する国際ワークショップ—その特徴、影響及び浄化について—」を開催しました。ワークショップには、世界各国の研究者七十一名の参加があり、各国からの調査・研究の成果が発表されました。国水研からは三名の研究者が参加し、研究成果の発表を行いました。本ワークショップの結果、多くの国で水銀の低濃度汚染が認められ、今後の調査・研究の継続の重要性が指摘されました。

また、十月十四日には以前から実施している国際共同研究の事例調査として、同国イドリア市にあるイドリア水銀鉱山跡を視察しました。イドリア市は一五〇〇年頃から水銀採掘で繁栄した町で、鉱山は一九八七年に閉鎖されましたが、かつてはスペインのアルマテン鉱山に次ぐ世界第2の産出量を誇り、過去五〇〇年で約十四万七〇〇〇トの水銀を産出したとされています。イドリア鉱山は水俣の場合と違い、メチル水銀を直接排出していませんが、長年の水銀精錬の残渣により周辺の河川やそれが注いでいるアドリア海を微量汚染していることが明らかになり、国水研も現地のジョゼフステファン研究所と共同に調査・研究を実施してきました。今回の視察によって、イドリア市は二〇〇四年からの回復・浄化事業により、水銀鉱山跡地の観光事業、伝統的なレース編み、そして新たな精密

機器の企業誘致により回復しつつあるのが実感できました。

来年度は「国際水銀会議二〇一〇（ハリファックス・カナダ）」において、スペシャルセッションの開催を予定しています。本年度のスロベニアにおけるワークショップの報告や議論を受けて「メチル水銀の汚染地域—環境と健康への影響—」のタイトルを予定しております。



ワークショップ会場

それでは、ワークショップに参加した研究者のコメントを紹介します。

疫学研究部 松山

今回のワークショップでは、水銀汚染のホットスポットに関する内容をメインテーマにして開催され、議題もモニタリングから健康影響、修復技術まで幅広く取上げられていました。自身の専門である環境分野に関する研究については、世界の現状を把握することができ有意義であったと思います。中でもフアガネリ博士（カナダ）の講演では、水環境中における水銀のメチル化に関する溶存態炭素の影響を簡潔にまとめ、その効果を溶存態炭素の分子サイズ及び分子量レベルで評価されていました。基本的な事象として、これまで認識されていたことですが、大変印象に残りました。最後に全般的な感想として、特に健康影響の分野では、やはり水俣のこれまでの経験や知識など、現在の当センター取り組みをもっと活かす方法を今後更に模索するべきと感じ

ています。



松山明人研究発表

基礎研究部 佐々木

カナダの研究者の発表によると、現在世界八十各国以上で、一〇〇〇一五〇〇万人の作業者が金属水銀を利用して、年間約三五〇トンの違法採鉱により金が生産されています。そして、その十倍の人々が直接的・間接的にその採鉱にかかわっています。特に南米では「ロンビア」、ブラジル、ペルー、エクアドル、ベネズエラで水銀の消費量が多く、環境影響と健康影響が問題になっています。

ます。この研究者は、このような地域では、貧困がゆえに違法な金採鉱は止めることができないので、それぞれの地域の特性に合わせて、水銀を直接環境に放出しない方法や人が水銀を吸入しない方法を開発し、その設備、器具を配布し、環境保全と住民への健康啓発活動を実践されており、とても印象的でした。



イドリア水銀鉱山 集合写真

国際・総合研究部 坂本

通常の学会のような単に発表を行って質疑応答というものだけで

なく、汚染源の認識、問題点、認識のギャップ、汚染対策等に関するワークショップが五グループに分かれて行われ、UNEP(国連環境計画)管理理事会に総説を提出することを目指し、それぞれのグループで取りまとめに関する討議が半日をかけて行われました。一九七〇年代には、スロベニア国イドリア水銀鉱山労働者の水銀蒸気曝露に関する健康管理にコバル博士(スロベニア)が尽力してこられました。水銀蒸気曝露評価、健康影響、健康管理に関して、現在進行形の水銀蒸気問題を抱える金鉱山、水銀鉱山、塩素・アルカリ工場及び蛍光灯工場等にとって、現在でも利用可能な非常に有意義な科学的な情報を提供し続けていることに、当センターの在り方を教えられたような気がしました。

### 国水研の動き

(平成二十二年八月～十一月)

- 八月八日 第二十回健康セミナー
- 八月二十日 ソウル大学公衆衛生学部スタッフ来所
- 八月二十七日 JICA研修(ジャマイカ他四カ国)
- 八月三十日 筑波大学附属駒場高等学校一行来所
- 九月十日 (財)放射線影響研究所常務理事来所
- 九月三十日 福岡県国際環境人材育成研修(中国)
- 十月六日 近藤環境副大臣水俣訪問
- 十月八日 JICA研修(マレーシア)
- 十月八日 JICA研修(バングラデシュ他三カ国)
- 十月九日 松本環境大臣水俣訪問
- 十月十四日 JICA研修(アルジェリア他四カ国)
- 十月二十五日 JICA研修(中国)
- 十一月二十五日 JICA研修(コスタリカ他四カ国)
- 十一月二十六日 環境省水俣病経験の普及啓発セミナー
- 十一月二十七日 第二十一回健康セミナー

# お知らせ

★**第二十回健康セミナー**  
を開催しました♪

八月八日「やせるアイデア三十」というテーマで第二十回健康セミナーを開催しました。講師は熊本市の堤整形外科クリニック 堤隆治先生でした。そのテーマどおり、三十項目のやせるアイデアを一つずつ丁寧に講演され、最後にはやせるための六つの格言をいただき、大変わかりやすく勉強になりました。また、講演後のアンケートには「今回の講演を踏まえて生活習慣を考えていきたいです」というお声を多数いただきました。当日の様子は「[こちら](#)をご覧ください」。



★**第二十一回健康セミナー**  
を開催しました♪

十一月二七日「糖尿病」というテーマで第二十一回健康セミナーを開催しました。今回は地元医師会、歯科医師会の全面的な協力により、司会、アドバイザー、講師を含めて九名の先生から、糖尿病について詳しく説明していただきました。一一八名の来場者があり、大変盛況でした。

講演後のアンケートには「各専門の先生から話が聞けて、勉強になりました。今後セミナーを開催してください」というお声を多数いただきました。当日の様子は「[こちら](#)をご覧ください」。

◎ **NIMD FORUM 2011**  
を開催します！

今回のNIMD FORUMのテーマは、「メチル水銀毒性のメカニズム」についてです。「メチル水銀毒性のメカニズム」については、水俣病が発見された一九五〇年代から現在

にいたるまで様々な研究が行われてきましたが、完全には解明されていません。私たちは、「メチル水銀毒性のメカニズム」を解明することによって、メチル水銀中毒の診断、予防および治療において有益な情報を得ることを目指しています。当日のプログラム等、詳細については「[こちら](#)」をご覧ください。

とき 一月二七日(木)

午前九時半～午後五時半

一月二八日(金)

午前九時～正午

会場 水俣病情報センター講堂

発表者 外国人研究者 七名

日本人研究者 七名

※日本語の同時通訳あり

対象 医療、研究に関わる方

一般の方

定員 二〇〇名

参加費 無料

申し込み方法

①氏名、②職種、③年代、④所属機関を明記の上、Eメール、またはFAXにてお申し込みください。申し込み・問い合わせ先

国立水俣病総合研究センター

NIMD FORUM 2011 事務局

担当 藤村成剛

Eメール [nda@nimd.go.jp](mailto:nda@nimd.go.jp)

FAX 〇九六六(六一)一一四五

編集後記 **本日のとんとん味**

今年も残りわずかとなりました。

この時期になると楽しみなのが夜のチッソ水俣工場脇の水路を彩るイルミネーション！

イルミネーションの起源は十六世紀にルーテル教会の創始者であるマルティン・ルターが始めたと言われています。当時はロウソクで彩られていたのですが、現代ではLEDの普及によって、省エネで、環境にやさしいイルミネーションへと変わりつつあるようです。さてさて、夜が待ち遠しくなるのは筆者だけではないのでは？

Eメール [mail@nimd.go.jp](mailto:mail@nimd.go.jp)

アクセスマップ

